カリキュラムの編成方法

2021.08.25
中井俊樹（愛媛大学）

講師紹介

- 三重県松阪市出身
- 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室
- 大学教育論、人材開発論
- 学長特別補佐、教育・学生支援機構副機構長、教育企画室長、教職員能力開発拠点代表者、SPOD企画・実施統括者
- 大学教育学会理事、日本高等教育開発協会副会長、大学教育イノベーション日本代表
- 大学教育、大学教員、大学の管理運営、看護教育などのテーマの書籍多数

本プログラムのねらい

- 大学のカリキュラムを編成するには、カリキュラムのどの部分を変えることができるのかを正しく理解する必要があります。本プログラムでは、カリキュラムとその構成要素に着目することで、所属組織のカリキュラムの編成に向けた論点と課題を整理することを目的とします。

専門用語の課題

- 専門用語は十分に整理されて共有されていない
  - 海外の概念からの翻訳、初中等教育との差別化、学問の用語と行政の用語の違い、各大学での用語の定義、使用する人の好み
- 具体例
  - 教学マネジメント、カリキュラムマネジメント、エンロールメントマネジメント
  - カリキュラム、学位プログラム、プログラム、教育課程
  - 準正課教育、準正課活動、準正課プログラム
  - 学習、学修、学び
  - 学長のリーダーシップ

構成

- 大学におけるカリキュラム
- 大学のカリキュラムへの期待
- 育成する人材像
- カリキュラムの構成要素
- カリキュラムの編成方法
- カリキュラムの編成に向けて

大学におけるカリキュラム

課題 特色あるカリキュラム

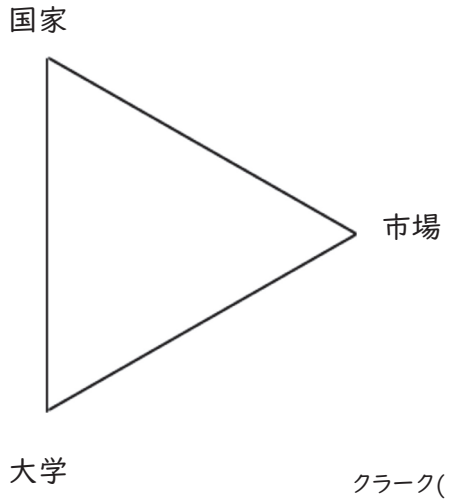
- 特色あるカリキュラムと聞いて思いつくカリキュラムはどのようなものでしょうか。

特色あるカリキュラム

小学校と大学のカリキュラムの違い

小学校のカリキュラム	大学のカリキュラム
国による基準多い 学習指導要領 検定教科書 学年制 選択教科なし 年齢主義 履修主義 主に担任教員が授業 45分授業	国による基準少ない 大学設置基準 教科書のない授業も 単位制 選択科目多い 課程主義 修得主義 さまざまな教員が授業 90分授業など

調整の三角形



クラーク(1994)

カリキュラム編成の3つの理念型

- 大学自治モデル
  - よく知っている大学自身が学問の自由にもとづいて決める
- 国家モデル
  - 公共性が高く国家予算を投入しているため国家が決める
- 市場モデル
  - 入学者市場や労働市場などの市場が決める

大学設置基準における教育課程

- 教育課程の編成方針
  - 第十九条　大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成するものとする。
  - 2　教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。
- 教育課程の編成方法
  - 第二十条　教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目及び自由科目に分け、これを各年次に配当して編成するものとする。

法的には大学に大きな裁量

- 大学設置基準において、大学は大きな裁量が任されている
  - 「体系的」「幅広く深い教養」「総合的な判断力」「豊かな人間性」
  - 教科ごとの学習指導要領が定められ、検定教科書が用意されている小学校とは大きく異なる
- 大学が主体的にカリキュラムを編成する

学外の参照基準や制約条件

- 大学教育政策
- 学習観の変遷
- 外部の各種基準
  - 各種資格取得の要件
  - 日本学術会議の各分野の教育課程編成上の参照基準
  - 学士力
- 入学者市場のニーズ
- 労働市場のニーズ
- 提携機関との協定
- 実習先などの協力機関
- ICT環境の変化

学内の参照基準や制約条件

- 教育理念や全学のDPなど
- 学校の立地
- 入学生の能力と意欲
- 教員
  - 専門分野以外は教えられない
  - 専門分野が軽視されるのを嫌う
  - 担当授業数が増加するのを嫌う
  - 非常勤講師の確保と予算
- 物理的制約条件
  - 教室数、座席数、固定机かどうか、ICT環境、TA予算・・・

単位制度

- 授業科目を単位と呼ばれる学習時間数に区分して修得していくモジュール方式（ロスブラット 1999）
  - 各学年での教育課程の修了を繰り返すことによって学習していく学年制とは異なる
- 長所
  - 選択制、柔軟性、学問の自由、他機関との接続
- 短所
  - 高い費用、高い管理コスト、複雑な時間割の作成、一貫性の欠如、統合性の欠如、履修指導の必要性

単位の設計

- 卒業に必要な単位数
  - 124単位以上
  - 教室以外でのeラーニングは60単位を超えない
- 1単位
  - 45時間の学修を必要とする内容
  - 授業+授業時間外の学習
- 総学習時間の設計
  - 45時間×124単位=5580時間

大学のカリキュラムへの期待

大学教育政策における大きな流れ

- 学士課程教育のプログラム化
  - 「学士課程教育を各教員の属人的な取組から大学が組織的に提供する体系立ったものへと進化させ、学生の能力をどう伸ばすかという学生本位の視点に立った学士課程教育へと質的な転換を図るためには、教員中心の授業科目の編成から学位プログラム中心の授業科目の編成への転換が必要である」（中央教育審議会 2012）
- 個別政策
  - シラバス、3つのポリシーの設定と公表、アセスメントプラン、単位の実質化、ナンバリング、履修系統図、CAP制、学修ポートフォリオ、学修行動調査、学習成果の把握と可視化、ディプロマサプリメント、内部質保証、カリキュラムコーディネーター・・・

「教学マネジメント指針」

- 中央教育審議会大学分科会（2020）
- 学修者本位の教育の実現、「供給者目線」から「学修者目線」へと転換
- 「内部質保証の確立に密接に関わる重要な営み」
- 「正課の教育を念頭に作成されている」
- 「この指針は大きな方向性を指し示すものであり、そのまま従う「マニュアル」であることは意図していない」「一定の型にはめることを意図するものではない」
  - 一方で、「〇〇が必要である」という文は63回使用されている（例：「ナンバリング」を実施することが必要である）

教学マネジメントの目的

- 手段の目的化に注意
  - 教学マネジメント体制の充実化は手段
  - 「大学がその教育目的を達成するためにに行う管理運営」（中央教育審議会 2018）
- 教育目的を達成するカリキュラム
  - 教育目的を達成するカリキュラムが提供できなければ、詳細な規則や組織があっても教学マネジメント体制は失敗？
  - 大学のカリキュラムは考慮すべき点が多く、編成するのは簡単ではない

「教学マネジメント指針」で示される意義

- 大学の教育目的の達成
- 学修者本位の教育の実現
- 密度の濃い主体的な学修
- 有限な資源の有効活用
- 内部質保証体制の確立
- 国際的な通用性
- 社会に対する説明責任

中央教育審議会大学分科会（2020）

カリキュラムマネジメント

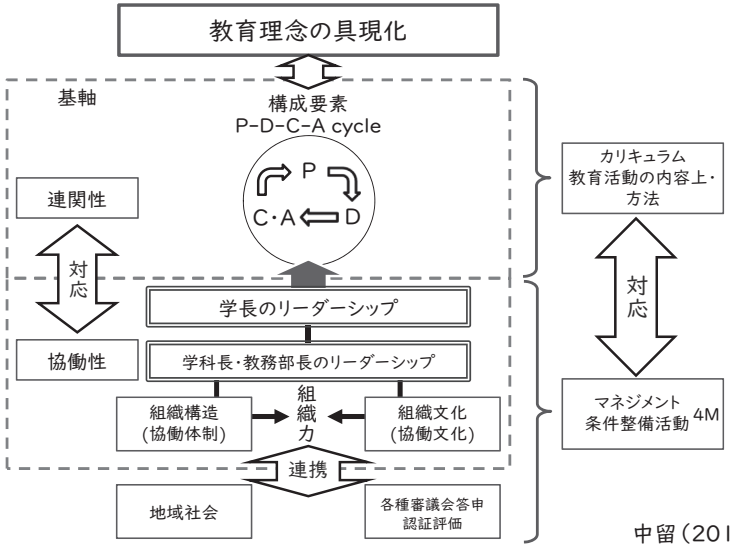
- 中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
- 「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営み」（田村 2011）
- 「大学のカリキュラムマネジメント」（中留 2012）

3つの側面

- カリキュラムの体系化
  - 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- PDCAの確立
  - 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- 資源の活用
  - 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

中央教育審議会（2016）

大学のカリキュラムマネジメント



中留（2012）

育成する人材像

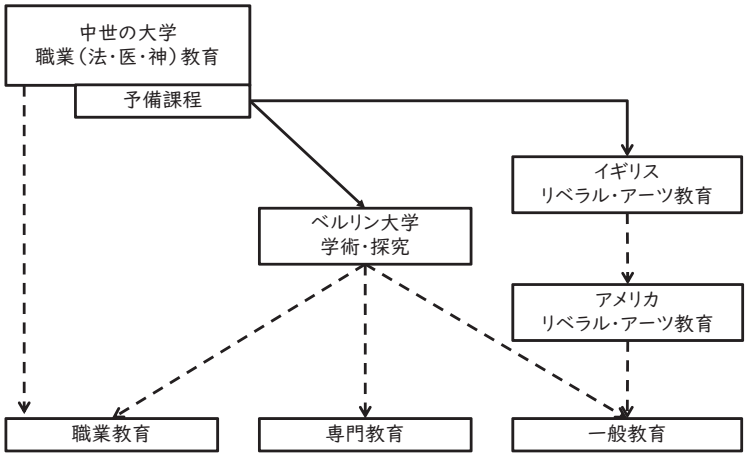
ディプロマ・ポリシー

- 各大学がその教育理念を踏まえ、どのような力を身につければ学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの。
- 策定の指針
  - 機関内のPDCAが機能するために、学習成果を具体的に示す
  - 「何ができるようになるか」に力点を置き、学生が身につけるべき資質・能力を明確化する
  - 学生の進路先などの社会におけるニーズも十分に踏まえる

3つのポリシーの意義

- 教育機関
  - 教育目標の共通理解
  - カリキュラムの体系化
  - 改善サイクルの確立
  - 機関の教育の特色の発信
- 入学希望者
  - 機関が期待する学習成果の理解
  - 卒業時に求められる学習成果の理解
- 社会
  - 大学と社会の連携の推進

大学教育の歴史



金子（2013）

カリキュラムの3つの方向性

- 職業教育
  - 職業人を育成する
  - 講義、演習、実習
- 一般教育
  - 教養ある市民を育成する
  - 講義、議論、チュートリアル、エッセイ
- 専門教育
  - 研究者、専門家を育成する
  - 講義、演習、実験、卒業研究

教育目標の設定で検討すべき視点

- 環境からの視点
  - 法令や国の動向、受験者市場や労働市場のニーズ
- 専門分野からの視点
  - 専門分野が求める水準、専門分野において何が本質的で重要か
- 学生からの視点
  - 学生の予備知識と能力、関心、学習習慣、卒業後のキャリア
- 物理的制約からの視点
  - 教室の特徴、学生数と教員数、情報機器、教育環境

教育目標の分類

- 認知領域（あたま）
  - 知識の再生や知的技能の発達についての目標
  - 想起、解釈、問題解決
- 精神運動領域（からだ）
  - 運動技能や操作技能に関する目標
  - 模倣、コントロール、自動化
- 情意領域（こころ）
  - 興味・態度・価値観の変容、適応力などの目標
  - 受け入れ、反応、内面化

到達目標と方向目標

- 到達目標
  - 獲得すべき学習内容が具体的に設定されている目標
  - 「決められた手順と方法の通りに血圧測定ができる」
  - 到達度評価が可能
- 方向目標
  - 方向性だけを示し、ここまでという限定のない目標
  - 「人々の多様な価値観を尊重する」
  - 到達目標に固執すると重要な目標から目をそらすおそれも?

RUMBAでチェック

- Real（現実的）
  - 目標を達成することが学習者のニーズに対応しているか
- Understandable（理解可能）
  - 目標がしっかり伝わるようにわかりやすく書かれているか
- Measurable（測定可能）
  - 評価基準がはっきりしており、観察可能か
- Behavioral（行動的表現）
  - 学習者の行動を表す行動目標で書かれているか
- Achievable（到達可能）
  - 学習者が達成可能なものか

課題　教育目標の課題

- 所属組織の教育目標の課題はどこにあるしょうか。ワークシートの構成要素ごとに5点満点で評価をして、どこに改善点があるのかを明らかにします。

教育目標の課題

	5点満点	改善点
法令や国の動向を踏まえている		
学問分野の基準を満たしている		
受験者市場や労働市場のニーズを踏まえている		
他大学にはない独自性がある		
教育理念や全学の方針を踏まえている		
望ましい学習を促すものになっている		
学生ががんばれば到達できる		
評価できるような具体的な表現になっている		
学生や教職員が記憶に残るような表現になっている		
構成員の強みが活かされている		
構成員が教える意義とやりがいを感じられる		
教育環境の強みが活かされている		

カリキュラムの構成要素

カリキュラム・ポリシー

- ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するのかを定める基本的な方針（中央教育審議会、2016）
- 策定の指針
  - DPを踏まえた教育課程編成、当該教育課程における学生の学習方法・学習過程の在り方等を具体的に示す
  - アクティブ・ラーニングの充実等、教育の質的転換に向けた取組の充実を重視する
  - 初年次教育、教養教育、専門教育、キャリア教育等の様々な観点から検討を行う
  - カリキュラムマップなどで補足する

時間的枠組み

- 学期の区切り方
  - 1学期制（通年制）
  - 2学期制（セメスター制）
  - 3学期制
  - 4学期制（クオーター制）
- 単位時間
  - 60分授業、90分授業、100分授業、105分授業
- 開講頻度
  - 週1回授業、週2回授業（連続）、週2回授業（月木、火金などの組み合わせ）

授業科目の設定

- 全体の開講科目数
  - 学生の選択、少人数授業、教育目標との整合性、教員負担、非常勤講師費用
- 分化的アプローチ
  - 親学問の体系によって細かく分類
  - 代数学、幾何学、基礎解析学、数理解析学・・・
- 統合アプローチ
  - 関連する学問の間を取り除いて関連性を高める
  - 学際科目、領域横断科目
  - 「社会科と理科ではなく生活科として指導しよう」
  - 「ビッグバンから生物多様性までをインテグレート科学の1科目にして学ばせよう」

授業科目の配列

- シーケンス
- 一般的な配列の例
  - 教養→専門基礎→専門、基礎→応用→発展、理解→練習→実践、習得→ 活用→探究、教員主導の教育→学生主導の教育
- 単純な積み上げだけではない
  - アーリー・エクスポージャー（早い時期に仕事や学問の現場に出る機会）
  - くさび型カリキュラム（専門教育、教養教育とも4年間を通じて履修）
  - らせん型カリキュラム（重要な概念を中核として何度も繰り返す）
- ナンバリングで各科目の位置づけの明確化

教育方法

- 法令用語による分類
  - 講義、演習
    - 15時間から30時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて1単位とする
  - 実験、実習、実技
    - 30時間から45時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて1単位とする
- 教育方法による分類
  - 講義法、アクティブラーニング、遠隔授業
- 教授言語

学生の履修の制御

- 必修科目、選択科目、自由科目
- キャップ制
  - 同時に履修できる授業科目に単位数で上限を設定する制度
- 各授業の履修条件
  - 履修できる学生の学年を明確にする
  - 事前に指定した授業の単位を修得していないと登録ができない
- 各授業の履修者の上限設定
- 履修モデルの提示

専攻分野の決定方法

- 入学者募集時の選抜枠
  - 一括入試（大くくり入試）
  - 学科・専攻単位での入試
- レイトスペシャリゼーション
- ダブルメジャー（2つの主専攻）、メジャーマイナー（主専攻と副専攻）
- 研究室配属のルール
- 転学部・転学科のルール
- 履修指導の体制

多様な学生への対応

- 習熟度別クラス編成
  - 高校までの履修の有無、プレースメントテスト
- リメディアル教育
  - 高校レベルの生物学、物理学、数学など
  - Eラーニングの活用
- 優等学位
  - 選抜された学生を対象としたオナーズ・プログラム
- 飛び入学、早期卒業、長期履修

正課外活動支援

- 正課教育
  - カリキュラムの中の単位授与を行う学習
- 正課外活動
  - クラブ・サークル・自主ゼミ・自治活動など
- 2つの間に活動を位置づける場合も
  - 準正課教育
  - 単位授与は行わないが大学・学部等が教育的意図をもって提供する教育・学習活動
  - サービスラーニング、海外研修、インターンシップ、ボランティア活動など

他機関の教育との連携

- 単位互換制度
  - 学生の選択肢の拡大、教育資源の有効活用
  - 大学設置基準で必要な授業を自ら開設することが原則として定められている
- 海外の大学などとの連携
  - 留学や海外フィールドワークの期間の確保
  - ダブル・ディグリー制度
  - ジョイント・ディグリー制度

課題 構成要素からみた課題

- 所属組織のカリキュラムにはどのような特徴と課題があるでしょうか。ワークシートの構成要素ごとに5点満点で評価をして、どこに改善点があるのかを明らかにします。

構成要素からみた課題

構成要素	5点満点	改善点
カリキュラム・ポリシー		
時間的枠組み		
授業科目の設定		
授業科目の配列		
教育方法		
学生の履修の制御		
専攻分野の決定方法		
多様な学生への配慮		
正課外活動支援		
他機関の教育との連携		

遠隔授業の組織的活用

課題　遠隔授業の組織的活用

- 遠隔授業は授業単位で活用することもできますが、組織単位で活用すると、これまで実施できなかった履修や学習を可能にすることができます。カリキュラムとして遠隔授業はどのように活用できるでしょうか。

カリキュラムの編成方法

カリキュラム編成の基礎

1. 目標を設定する
2. 目標を達成するために必要な教育経験を明確にする
3. これらの教育経験を効果的に組織する
4. 目標が達成されているかどうかを評価する

タイラー（1978）

より細かな編成の手順の例

- 課題の特定化
- DPの策定
- CPの策定
- カリキュラムマップの作成
- スコープの設定
- シーケンスの設定
- 履修の制御方法の設定
- 新規の授業の内容の明確化
- 授業担当者の決定
- 時間割の作成
- 授業のシラバスの作成
- 学生向けの履修ガイドの作成

改訂の大きさの度合い

- 大きな改訂
  - 白紙の状態で教育目標から見直してカリキュラムを新たに編成する
  - 教育機関の新設、環境の大きな変化、危機的状況、支援してくれるトップの存在、改組のタイミング、外部からの厳しい評価
- 小さな改訂
  - 現在のカリキュラムを前提に改善できる点を明らかにしていく
  - 毎年のカリキュラムの改善

カリキュラムの編成に向けて

課題　カリキュラムの編成の課題

- これまで学んでことを踏まえ、カリキュラムの改善に向けて何から始めることができるでしょうか。何が課題であり、具体的にどのような行動を行うのかなどを整理します。

カリキュラムの編成の課題

課題	解決方法	予想される困難

カリキュラムの編成に向けて

- 大学のカリキュラムを編成するには、カリキュラムの構成要素を構成員が正しく理解することが第一歩
- カリキュラムの構成要素を理解すれば、大学が抱えている課題の解決に向けてさまざまな方法があることに気づく
- カリキュラムの改善は、さまざまな制約条件があるが、教員間での継続的な対話と合意形成を踏まえて着実に進めていただきたい

主な参考文献

- 愛媛大学教育企画室（2015）『データから考える愛大授業改善 Vol.01』
- 金子元久（2013）『大学教育の再構築』玉川大学出版部.
- 京都大学高等教育研究開発推進センター編（2012）『生成する大学教育学』ナカニシヤ出版.
- バートン・クラーク（有本章訳）（1994）『高等教育システム－大学組織の比較社会学』東信堂.
- 佐藤浩章、中井俊樹、小島佐恵子、城間祥子、杉谷祐美子編（2016）『大学のFD Q&A』玉川大学出版部.
- ラルフ・W・タイラー（金子孫市監訳）（1978）『現代カリキュラム研究の基礎―教育課程編成のために』日本教育経営協会
- 田中耕治編（2018）『よくわかる教育課程　第2版』ミネルヴァ書房.
- 田中耕治、三石初雄、水原克敏、西岡加名恵（2005）『新しい時代の教育課程』有斐閣.
- 田村知子編（2011）『実践・カリキュラムマネジメント』ぎょうせい.
- 田村知子、村川雅弘、吉冨芳正、西岡加名恵編（2016）『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい.
- 中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
- 中央教育審議会大学分科会（2020）『教学マネジメント指針』.
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会（2016）『「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン』
- 中央教育審議会大学分科会（2014）「大学のガバナンス改革の推進について（審議まとめ）」
- 中井俊樹編（2015）『アクティブラーニング』玉川大学出版部.
- 中井俊樹編（2019）『大学SD講座1　大学の組織と運営』玉川大学出版部.
- 中井俊樹編（2021）『大学SD講座2　大学教育と学生支援』玉川大学出版部.
- 中井俊樹、鳥居朋子、藤井都百（2013）『大学のIR Q&A』玉川大学出版部.
- 中留武昭（2012）『大学のカリキュラムマネジメント―理論と実際』東信堂.
- 日本高等教育開発協会（2019）『カリキュラムコーディネーター養成研修会<初級編>～組織がチームとして教育に取組むための仕組み作り～』2019年1月26～27日大阪大学豊中キャンパス研修配付資料.
- 日本高等教育開発協会、ベネッセ教育総合研究所（2016）『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン』ナカニシヤ出版.
- 前田康裕（2018）「まんがで知る教師の学び3」さくら社.
- 松下佳代（2016）「アクティブラーニングをどう評価するか」松下佳代・石井英真（編）『アクティブラーニングの評価』東信堂.
- 文部科学省（2020）「平成30 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」
- シェルダン・ロスブラット（吉田文、杉谷祐美子訳）（1999）『教養教育の系譜―アメリカ高等教育にみる専門主義との葛藤』、玉川大学出版部.